

兵庫県の地場産業の紹介



兵庫県の産業は阪神、播磨の二大工業地帯における鉄鋼・造船・機械あるいは化学工業を根幹として発展してきました。しかし一方では、郷土の歴史と伝統に培われ、地域社会と密着した地場産業の産地が県内各地で形成されています。

県内には、5業種（大分類）、約40業種の地場産業が集積しています。特に、清酒、皮革、手延素麺、かばん、線香、釣針などは全国トップシェアを誇り、この他にも、ケミカルシューズや播州織、

三木金物（利器工匠具）、淡路瓦などが全国的に著名な産地として知られており、地域における重要な役割を果たしています。

【繊維】

播州織

概要

（1）起源は古く、寛政4年（1792年）比延庄村（西脇市比延町）の大工飛田安兵衛が京都西陣からその技術を導入したことが始まり。

（2）平成20年に地域団体商標「播州織」を登録し、高付加価値織物と品質を国内外へ広くアピールすると共に短納期・小ロット化に対応できる体制づくりを行い、ロゴマークのPRと普及を進める。

起源・沿革

播州織は西脇市を中心に加西市、加東市、丹波市、多可郡、神崎郡の四市二郡にまたがり、県下有数の地場産業として成長してきた。

その起源は古く、寛政4年（1792年）比延庄村（西脇市比延町）の大工飛田安兵衛が京都西陣からその技術を導入したことが始まりと伝えられている。明治の初めには、津万郷（市内津万）を中心に60～70軒の織布業者が機業を営んでいた事実が史料に記されている。

明治25年には多可郡綿業組合を設立して組織化が始まり、全国でも類をみない強固な組合精神が現在も受け継がれている。

当時の主要製品は国内向けの着尺地（バンタツ）が中心であったが、第一次世界大戦を境に海外市場の混乱に乘じ東南アジア向け先染織物の販路開拓に成功して輸出向けが中心となった。昭和に入ると業者数及び生産額が増加、品種も多様化した。昭和5年には広幅輸出用織機8,700台を数え、年間1億平方ヤードを生産する一大輸出産地として第一次黄金時代を築いた。

戦後は発展途上国の繊維工業の発達とともに、従来の東南アジアを主力とする仕向地での競争を避けて、高級綿布生産に産地機構全般を再編成した。昭和29年頃よりアメリカ市場の開拓に成功し、同市場を中心としてカナダ、オーストラリア、中南米、アフリカから欧州の一部まで販路を拡げてほとんど世界各地に商圏を確立し、第二次黄金時代を迎えた。

昭和 38 年頃より従来の綿スフ織物一本やりの保守的かつ画一的な生産形態が徐々に改革され、化合織ギンガム、化合織ドビー、麻混など各種の新品種が開発されて生產品種に弾力性が加わり、国際市場における競争力は一段と強化された。

近年は構造改善事業により、設備の近代化・合理化を推進し、製品の高級化や高付加価値化を図って国際市場における競争力を充実させた。さらに昭和 51 年度より播州織総合開発センターを軸として、新商品・新技術の開発、人材養成、情報の収集提供、各種試験検査などソフト面の事業を行い、積極的に取り組んできた。しかし、昭和 60 年以降の急激な円高は輸出環境を一層厳しいものにした。これに対し産地では、高級化や国内市場の拡大を図り対応した。

市況は安価な輸入品の増加に加え、国内景気の低迷などから国内需要が大幅に減退し輸出環境も悪化している。そのため業界は、準備工程の円滑化を図るために「協同組合播州織総合準備センター」において新たに畦取りを開始し、経通し作業とあわせて準備工程の円滑化を図るとともに、新素材・新製品の開発、見本市の開催など需要の喚起を図るための対応策を展開している。

また、産地全体の問題でもある産業廃棄物の処理については「播州織産地対応システム」を構築し、処理と再利用を行っている。

平成 20 年 2 年に地域団体商標「播州織」を登録し、高付加価値織物と品質を国内外へ広くアピールするとともに、短納期・小ロット化に対応できる体制づくりを行い、ロゴマークの PR と普及を進めている。

最近では、若手織布業者により製品化の取組や展示会に出展により自販への取組を行うとともに、海外への販路を模索する等前向きな事業の取組を行っている。

問い合わせ先

播州織工業組合

住所：〒677-0033 西脇市鹿野 267-6

電話：0795-22-1881

FAX：0795-22-7883

E-mail：oriren@silver.ocn.ne.jp

兵庫県織物協同組合連合会

住所：〒677-0033 西脇市鹿野町 162

電話：0795-22-1881

FAX：0795-22-7883

事業活動：

- ① 輸出振興対策事業
- ② 環境問題に関する事業-産業廃棄物処理システムの推進及び産業廃棄物の利活用についての研究並びに騒音・振動対策等についての指導
- ③ 繊維産地活性化事業-品質向上に関する協議並びに産地内団体との共通課題についての対策と検討
- ④ 労務問題-年間休日の設定
- ⑤ 国内見本市の開催-播州織総合素材展の開催、各種展示会への参加
- ⑥ 金融事業-金融相談、各種融資制度の説明等
- ⑦ 各種保険事業-火災保険、生命保険、傷害保険、自動車保険、労働保険等の実施
- ⑧ 組織活動の推進-青年部会、サイジング部会等における調査研究事業や取引改善委員会による取引適正化の取り組み

糸・染色

概要

(1) 約 200 年前に北播磨地域に播州織が興って以来、京都の友禅染から取り入れた技術に筑前博多の染色法が加わり、織物の発展とともに成長。

起源・沿革

繊維染色業界は、約 200 年前に北播磨地域に播州織が興って以来、織物の発展とともに成長してきた。その技術は文政年間(1818~29)に京都の友禅染から採り入れられたもので、後に筑前博多の染色法が加わった。明治初期までの技術水準は植物染色の段階であった。

明治 10 年頃、ドイツ製化学染料の導入で色調の多様化と技術の向上を促した。それに伴い経営形態面でも、家内工業から近代化的企業に変貌を遂げた。また、技術の改善や安売り防止などを目的とする「恵比須講」と呼ばれる協同組織が生まれ、今日の協同組合の原型となった。

先染織物における糸の染色と漂白は高い水準の技術を要求され、色調の多様さもあり、機械化は困難なものとしていた。しかし、時代とともに染色機械の発達、染料の改良等によって機械化が可能となった。さらに、従来の総染色からビーム染色、綿スフから合成繊維染色へと技術革新が行われた。

戦後、染色業界は順調に発展し、昭和 47 年には生産量 8,200 万ポンドに達した。その後、オイルショックや対米繊維輸出規制等により、昭和 49 年の生産量は 5,300 万ポンドとなり、それまでの平均水準の約 75%に低下した。しかし、生産量は再び増加基調に転じ、昭和 62 年には 1 億 1,044 万ポンドと過去最高を記録した。その後、バブルの崩壊による不況や急激な円高により平成 7 年の生産量は 7,575 万ポンドまで低下した後は低下傾向が続いている。

染色業界は昭和 45 年度から 49 年度にかけて、播州織に併せて中小企業近代化促進法に基づく構造改善事業に取り組んだ。また昭和 45 年、53 年、56 年と 3 回にわたって排水処理施設および関連機器の整備に約 30 億円を投じるなど、公害対策にも万全を期している。

これまで染色業界は、過剰設備の政府買い上げや企業合同などによって体力をつけてきた。しかし染色業界や播州織業界の環境は内外共に極めて厳しい。そのため染色業界は新しい染色方法の開発、先端技術の積極的な導入等、徹底した合理化を行い、新しい発展を目指している。

問い合わせ先

兵庫県繊維染色工業協同組合

住所：〒677-0015 西脇市西脇 926

電話：0795-22-3281

FAX：0795-22-3283

事業活動：

- ① 会議連絡協調の業務
- ② 専門委員会
- ③ 試験研究
- ④ スラッジ処理場運営
- ⑤ スラッジリサイクル事業

但馬ちりめん

概要

- (1) 独自の撚糸機で強い撚りを掛けた糸で生産しているため、しなやかで優美さと豪華さを備える。
- (2) シボがあるため肌触りがよく、シワにならず染め上がりが美しく、美術的価値あり。

起源・沿革

但馬ちりめんは、文化年間(1807~17)に丹後峰山から技術が移入されたことに始まる。

但馬ちりめんの産地は、湿度が高いことや産地が円山川の上流に位置し水資源に恵まれていることなど、絹織物生産に適した条件の下で発展した。その後、大正 15 年に電力供給に伴い本格的に発展し、戦前のピークとなった昭和 12 年には織機が 1,344 台に達した。

しかし、同年に日華事変が勃発し、続いて太平洋戦争が始まると軍部の命令により大半の織機が供出され、残った 280 台の織機は指定生産に当たった。

昭和 27 年に県の産業振興計画、続いて出石郡内の町村による特産振興策などが実施され、昭和 35 年から 40 年にかけては家内工業規模ながら毎年約 100 件もの工場が増加した。

但馬の白生地ちりめんは独自の撚糸機で強い撚りを掛けた糸で生産しているため、しなやかで優美さと豪華さを備えている。また、シボがあるため肌触りがよく、シワにならず染め上がりが美しいため美術的価値が認められている。さらに、耐久性に富むことから染め直しが可能で、流行の変化の激しい現代にも適している。

最近の業界は、どんすちりめん、駒縷子ちりめん、紋意匠(もんいしょう)ちりめん、変り無地ちりめんなど高級品の生産に注力しており、新デザインの開発や洋装等新分野への進出についても意欲的に取り組んでいる。

問い合わせ先

兵庫県絹人絹織物工業組合

住所：〒668-0345 豊岡市但東町中山 268-1

電話：0796-56-0038

FAX：0796-56-0038

事業活動：

- ① 但東町、出石町を中心に県下に散在する絹人絹織物業者のための生産調整
- ② 新商品「絹ゆかた」のPRなど

靴下

概要

- (1) 奈良県・東京都とともに全国三大産地を形成。
- (2) 組合員の相互の努力と協力で「品質の兵庫」としての地位を確立。

起源・沿革

播磨地域での靴下製造業の発祥は、明治初年に印南郡志方町の住民が上海から手廻しの靴下編立機を

持ち帰り、製造を始めたことによると言われている。

当産地での靴下製造は大阪の靴下工業の勃興に遅れたため、その製造問屋の傘下に発達した。当初は農家の副業であったが、明治中期に煙草が官営事業となるに伴い転廃業者の資金が流入し、産地の基盤ができあがった。

大正初期に半自動式靴下編立機、さらに大正 13 年には自動編立機が輸入されるなど技術革新が進み、また大正 12 年の関東大震災により当時第一の靴下産地であった東京が致命的な打撃を受けるなどの情勢変化もあって、播磨の産地規模は急速に拡大した。また東南アジアや中国等にも輸出されるようになった。

また、昭和初期の金融恐慌、戦時の軍需統制などにより業界は大きな打撃を受けたが、戦災を免れたため他産地よりも立ち直りは早かった。

その後、ナイロンを始めとする合成繊維の開発により素材が大きく変わった。それに合わせて生産形態においても、設備の近代化、技術水準の高度化が進んだ。

現在では、奈良県、東京都とともに全国三大産地を形成している。産地の企業形態は、1.繊維商社的有名ブランドメーカーの協力工場として生産を行い、百貨店や量販店に商品を供給するもの、2.他メーカーの下請として半製品や賃加工品を製造するもの、3.卸売業務に特化したもの、などの 3 つに大別される。

問い合わせ先

兵庫県靴下工業組合

住所：高砂市神爪 1-13-20

電話：079-432-3665

FAX:079-432-3634

産地ブランド：「キップス」・「ロンセ」・「カントリー」の推進

URL：<http://www.hyogosocks.or.jp>（外部サイトへリンク）

事業活動：

- ① 地元住民への認知度向上のため、例年 11 月に「靴下まつり」を開催
- ② 加古川靴下の PR のため、加古川市内で「くつしたの店」かこがわ工房 Kips を運営
- ③ Kips オンラインショップの運営
- ④ 産地ブランド：「キップス」・「ロンセ」・「カントリー」の推進
- ⑤ 情報、資料の収集提供
- ⑥ 産地 PR 事業

作業手袋

起源・沿革

作業手袋業界は靴下製造業と関連が深く、大正初期頃に靴下業界と相前後して姫路市飾東町、印南郡志方町に発祥した。当時は農家の副業として営まれていたが、第一次世界大戦時の好況により企業化が進んだ。生産地も近隣に発展し、作業手袋(旧軍手)産地として認められるようになった。作業手袋は、従来は主に防寒用として使用されたが、工業発展に伴い危険防止用として作業の必需品になった。

第二次世界大戦時には統制が敷かれ、組合は兵庫県メリヤス工業協同組合の手袋部として原糸の配給、製品の販売統制事業を行った。昭和 25 年に統制が解かれると、兵庫県手袋工業協同組合が結成された。

同協同組合が統制解除後の自由競争による事業不振に陥り有名無実化したため、業界は昭和 39 年に通商産業省の認可を得て新たに兵庫県作業手袋工業組合を設立した。

問い合わせ先

兵庫県作業手袋工業組合

住所：〒671-0207 姫路市飾東町山崎 542-2

電話：079-262-0018

FAX：079-262-0992

事業活動：

- ① 品質重視による輸入品との差別
- ② 商品の適正価格の安定化
- ③ 新商品開発（新素材による製品化）
- ④ お客様とのコラボレーション

撚糸

概要

（1）播州織をはじめとする織物の繊維産業における素材提供者として重要な位置を占める。

起源・沿革

兵庫県内の撚糸業は、明治 38 年に赤穂市の桃井製網で漁網用撚糸が製造されたのが始まりと言われている。

但馬地方の絹織物用撚糸では終戦後まもなく、播州産地では播州織の高級化が要求され始めた昭和 30 年頃から企業としての形態が整い始めた。当時、撚糸専門者は 7～8 軒で設備数も少なかったが、その後業者数は年々増加し、昭和 38 年には 60 軒近くになり兵庫県撚糸工業組合が設立された。組合設立と同時に、業界の生産秩序の維持と企業の安定のため「中小企業団体の組織に関する法律」に基づき、撚糸機の登録制を実施した。

以降、播州織をはじめとする織物の高級化や多様化に伴い、撚糸業者も副業的形態から本格的に専門業者となった。繊維産業における素材提供者として重要な位置を占めている。

しかし、撚糸専門者の増加と市況の落ち込みから慢性的な設備過剰状態に陥り、業界では設備共同廃棄事業による過剰設備の買い上げ廃棄を行い、需給調整と転廃業の促進に努めてきた。

さらに、平成 5 年 10 月末日から登録制が廃止となり、組合員でなくとも事業開始が可能となったために組合運営そのものも厳しい時代となっている。

問い合わせ先

兵庫県撚糸工業組合

住所：〒677-0015 西脇市西脇 990

電話：0795-22-3901

FAX：0795-22-8739

神戸アパレル

概要

(1) 開港以来の神戸のハイカラな文化や海と山の恵まれた自然環境を背景にして生まれた産業。

起源・沿革

神戸アパレルは、開港以来の神戸のハイカラな文化や海と山の恵まれた自然環境を背景にして戦後新しく生まれた産業である。多くの企業が神戸市中央区に本社を置き、商品の企画、デザインと卸機能を中心に成長してきた。高級ブラウスやニット製品の婦人服をはじめ、子供服、ベビー用品等神戸らしい特徴をもつ商品は、神戸ファッションとして全国的にも高い評価を受けている。昨今では、製造から小売までを手がける「SPA」が主流となり、また、ネット販売にも積極的に取り組むケースが増えるなど商品の流通形態に大きな変化が起きている。

神戸ではアパレルをはじめ、ケミカルシューズ・洋菓子・洋家具・真珠等の生活文化産業をファッション産業として捉え、これらの産業をバックアップするため、昭和 48 年に「ファッション都市宣言」を行ったのを皮切りに、昭和 58 年にはアパレルはもとより、真珠・スポーツ・食品・化粧品企業などによる「神戸ファッションタウン協議会」を結成し、ファッション都市化を進めてきた。それと相前後して神戸アパレルは急速な成長を遂げ、付加価値の高い知識集約型産業の中核として大きくクローズアップされている。

また、宣言以降は経済界と行政が一体となって「ファッション都市づくり」を推進し、「神戸ファッションコンテスト」や「KFO クリエーターズ倶楽部」といった神戸アパレルの人材育成や販路開拓を支援する取組などを進めてきたほか、平成 14 年には、今や日本最大級のファッションイベントである「神戸コレクション」が始まり、これに連動した街をあげてのイベント「神戸ファッションウィーク」も開催されるなど民間主導でもファッション都市を盛り上げる動きが活発に行われている。

ハード面では平成元年 11 月、ポートアイランドに、アパレルを中心としたファッションタウンがオープンした。さらに平成 3 年には、六甲アイランドに日本初の本格的ファッションビジネスセンター「神戸ファッションマート」がオープンし、同年神戸ファッション協会、平成 9 年には神戸ファッション美術館が設立されるなど、神戸アパレル支援の仕掛けが着々と整備されてきた。

問い合わせ先

公益財団法人神戸ファッション協会

住所：〒650-0046 神戸市中央区港島中町 6-1 神戸商工会議所会館 6 階

電話：078-303-3123

FAX：078-303-3122

URL：<http://www.kfo.or.jp> (外部サイトへリンク)

参考URL

兵庫の地場産業（概説） <http://kdskenkyu.saloon.jp/jibasan.htm>
同上（食料品） <http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs01foo.pdf>
同上（繊維） <http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs02tex.pdf>
同上（化学・雑貨） <http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs03che.pdf>
同上（窯業・土石） <http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs04pot.pdf>
同上（機械・金属） <http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs05mac.pdf>
兵庫の伝統的工芸品（概説） <http://kdskenkyu.saloon.jp/tracrafts.htm>
